**「新婚さん」　吉本ばなな**

　私は一度だけ、電車の中でものすごく偉大な人に会ったことがある。もうずいぶん前のことだが、記憶は鮮明だ。

　敦子と結婚して一か月位の頃だった。私はまだ二十八でその夜ひどく酔っていた。降りるべき駅はとうに過ぎていた。夜遅くのその車両には、私を含めて四人しかいなかった。

　帰りたくなくて、降りそびれたのだと思う。さっき、酔った視界に私の降りるべき駅の見慣れたホームがゆっくりと迫ってきて、ぴたりと静止した。ドアが開き、新鮮な夜風が入ってきた。そして再びドアは閉まり、まるで永遠に閉ざされたようにぴったりと閉まり、電車はゆっくり走り出した。知っているネオンが次々に走り去っていった。それを座ったままただじっと見ていた。

　しばらくしたある駅で、その老人は乗ってきた。いわゆるホームレスの人らしく、身なりはぼろぼろで、髪とひげはのびてがっちりと固まり、異様な臭気を放っていた。私以外の三人はそうっと、まるで合言葉を聞いたかのように左右の車両に移動していった。私は動きそびれて、車両の真ん中あたりの席にどっしりと深く座り込んだままだった。どうでもよかったし、そういう特別な対応をむき出しにする人々にかすかな嫌悪感があったかもしれない。

　老人はなぜかわざわざ私の横にしかもぴったりと座った。息を止め、そちらは見ないようにした。

　正面の窓ガラスに、私と彼の顔が並んで映っていた。暗やみに斜めに浮かぶ美しい夜景に重なって、二人の男が寄り添っていた。私は我ながら面白いくらい困った顔をしていた。

「どうして帰りたくないんだろうねえ！」

　彼がかすれた、しかし大きな声で言った。

　その言葉が自分に当てはまっていることにはじめ全く気づかなかった。彼の臭さで思考が止まっていたのかもしれない。目を閉じて、寝たふりをした。しばらくしてまた彼が私をのぞきこむようにして言った。

「帰りたくないわけは本当のところ何だろう。」

　私は目を閉じたままでいた。さすがに私に話しかけていることがわかっていたから。電車の行く規則的な音がやたらに大きく聞こえた。

「私がこういう姿でも帰りたくない？」

　彼が言った。目を閉じていてもその音の変化ははっきりわかった。ちょうどテープを早回ししたように、そのせりふの途中でぎゅうっと音が高くゆがんだ。空間ごとゆがんだように、頭がくらっとした。そして、そのおそろしい臭気がふっと消え、何か甘い……花のような、ごく薄い香水の匂いのような香りがじょじょに感じられるようになった。目を閉じているから匂いがよくわかった。それは女の肌の匂いと、生花の混じったようなかすかに澄んだ……誘惑にかられて見てしまった。

　そして、心臓が止まりそうになった。

　私の隣にはなぜか女がいた。あわてて両隣の車両を見回したが、人々はまるで異空間にいるように遠く、こちらを見ず、車両と車両の間には透明な壁があるかのように皆さっきまでと同じ疲れた顔で電車に揺られているのだった。何が起こったのだろう、このチェンジはいつの間になされたのだろう、と私は再び女を見た。

　つんと前を向いて座っている。

　国籍も分からない。とび色の瞳に、長い茶の髪。黒いワンピース。すらりと伸びた足に黒いエナメルのハイヒール。確かに私の知っている顔だった。気にいっている芸能人や、初恋の子や、いとこや母や思春期に性欲を覚えた年上の人や、そういう「いつかのだれか」に似ている気がした。大きくふくらんだ胸元に生花のコサージュをつけていた。パーティの帰りだろうか、と思った。さっきまでここにはあの汚い男がいたのに。

「これでも帰りたくない？」

　女が言った。匂い立つような甘い声で。だからこれは酔って見ている悪夢の続きだと思おうとした。ホームレスから美女へ、醜いあひるの子的変身の悪夢。何が何だかわからない分、目の前にあることだけが納得できた。

「そういう姿だとますます帰りたくなくなるんだよ。」

　私は言った。余裕のある言い方に自分でも驚いた。口が勝手に心を開いてしまったような感じだった。電車はまた駅に停車したが、なぜかこの車両には誰も乗ってこなかった。両隣の車両にばらばらと乗り込む人々はただ暗く退屈そうな顔をしていて、こちらを見向きもしない。夜を抜けてゆく、本当は遠くへ行きたいかもしれない人々。

「へそ曲がり。」

　女は言った。

「そういう簡単なものでもないんだ。」

　私は言った。

「どうして？」

　女が私の目を覗き込んだ。胸元の花が揺れた。大きな瞳にまつげがびっしりとはえているのが見えた。深く、どこまでも遠く、子供のとき初めてプラネタリウムを見たときのあの丸い天井を思い出した。こんなに小さい空間に大宇宙を閉じ込めている。

「さっきまで汚いおやじだったくせに。」

「どっちにしても怖いでしょう。」

　女は言った。

「奥さんはどういう人？」

「小さいよ。」

　べらべらしゃべっている自分を遠くから見ている感じだった。おまえはまるでをしているようだよ。

「背がすごく小さくて、髪が長くて、目が細い。そのせいで怒ってても笑っているように見えるんだ。」

「玄関を開けると？」

　確かに女はそう言った。

「開けると必ず笑って出てくるんだ。義務か聖職のように笑いながら。テーブルには花とか菓子とかがあるんだ。奥でテレビの音がするんだ。レース編みをしているんだ。仏壇にいつも新しいご飯がそなえてあるんだ。日曜の朝起きると、掃除機や洗濯機の音がするんだ。隣のおばさんと世にも明るい調子で世間話をしている。近所の猫に毎晩えさをやりに行くんだ。ドラマを見て涙ぐむし、ふろで鼻歌を歌っているんだ。縫いぐるみにはたきをかけて話しかける。女友達から電話があると無理に笑って取り次ぐんだ。故郷の同級生と女子高生みたいに長電話をして笑いころげてるんだ。そういうものすべてがかもしだす何かで部屋全体のトーンが一段明るくなっていて、どうしてだか『うわーっ、やめてくれ』と叫びたくなる。暴れそうだ。」

　私はまくしたてた。女はうなずいた。

「わかる。わかる。」

「わかられてたまるか。」

　私が言うと、女は笑った。妻の笑顔とは違う、しかしやはりずっと昔のいつか見たような、知っている感じの笑い方だった。まだ半ズボンの子供の時、真冬に友達と登校していてあまりにも寒いから寒いというのがばかばかしくて、思わずお互い笑ってしまったことをふいに思い出した。そしてこれまでの人生で誰かとそうして笑いあった、いくつもの場面が浮かんできて、突如いい気分になった。

「いつから東京にいるの？」

　女が言った。東京、という単語がそのから出たとき、おかしなことに気づいた。私は言った。

「ちょっと待って、あなた、どこの国の言葉使ってる？」

　わからなかったのだ。女はうなずいて、言った。

「どこの国のものでもない、あなたと、私にしか通じない言葉で話している。すべての人どうしにそういう言葉がある。本当はね。あなたと誰か、あなたと奥さん、あなたと前に一緒にいた女、あなたと父親、あなたと友達、その人たちどうしだけのためのたった一種類の言葉が。」

「二人だけじゃなかったら？どうなるんだ、その言葉っていうのは？」

「三人いたら、その場のその三人だけの言葉が、そこにひとり増えたら、また言葉は変わる。私はずっとこの街を見てきた。あなたも一人で立って、そうしてきた人。そういう人は沢山いて、私はあなたにそういう人にしか通じない『自分と東京との距離を同じくする人』の言葉で話している。でももしここに独り暮らしの優しいおばあさんが座っていたら、私はその人とは孤独についての言葉で話すでしょう。今から女を買いに行く人であれば、性欲についての言語で。そういうものなの。」

「じゃあと、おばあさんと、女を買いに行くと、あなただったら？」

「口の減らない子ね。でもそうしたらきっと、夜の電車で運び去られるそれぞれの人生についての言葉を、世界中のどの四人でもなく、今ここにあるその四人ので語るわ。」

「そういうものかな。」

「いつから東京に？」

「十八の時から。母親が死んですぐに出てきた。ずっと東京にいた。」

「女と暮らすってどういうこと？」

「目の前で日常のどうでもいいささいなことや、あまりにもくだらないことをえんえん話されたりすると、奇妙なを覚える。敦子といると、そういうことばかりを大切にして生きている女という概念そのものといるようだ。」

　記憶もないくらいに小さいころ、スリッパでばたばたとを通り抜けて行った母の足とか、飼っていた猫が死んだ時の幼いいとこの泣く後ろ姿とか。刻みつけられた凝視の、映像。異物としての他者の親近感やぬくもりの、胸騒ぎのするような感触だ。

「そういう感じなのかしらね。」

「あなたはどこへ行くんですか。」

　私はたずねた。

「こうやって電車に乗って、ずっといろいろなものを見ている。終わることのない直線のように、いつからかずっとこうしていた。たいていの人は知らない。電車を朝定期を出して改札を抜け、夜、もとの駅に戻ってくる安定した箱だと思っている。違う？」

　女は言った。

「そうでないと、毎日が取りとめのない恐ろしく不安定なものになってしまう。」

　私は言った。女はうなずき、そして続けた。

「実際そうしろといっているのではない、すべては心の問題だ。もし人生を電車という側面からだけ見たなら、帰る家や続いてゆく仕事などを電車という機能とごっちゃにしなければ、ここに乗っているほとんどの人が、そのかばんの中に入っている分のお金だけでいますぐに、驚くほどとおくに行くことができる。」

「そりゃそうだ。」

「そういうことをいつも考えているのよ、ここで。」

「暇なんだな。」

「同じ枠にいるのよ、ここに乗っている間。ある人は本を読み、ある人は中吊り広告を眺め、ある人は音楽を聴いている。同じ時間の中で、私は電車の可能性について考えてる。」

「なんで突然美女になるのさ。」

「降りるべき駅で降りなかったあなたと話がしたかったから。気を引くために何となく。」

　自分が誰と、何を話しているのかをまともに考えられなくなっていた。ただ、繰り返し電車は駅に停車し、また夜の中に滑り出す。闇に包まれ、住んでいる町はどんどん遠ざかってゆく。

　隣にいるものは、何か懐かしい感触を持っている。生まれるより前、嫌悪も愛情もごっちゃになって空気に含まれている場所の匂い。しかしその反面、近寄り難く触れたら危険なものであることも同時に伝わってきた。私は内心びくびくしていた。じぶんの酔いや狂気の心配ではなくて、より本能的な、卑小感だった。明らかに自分より強大なものに出会った野生動物が無条件に抱くであろう、逃走への欲求のような。